

(六) 遊びと発達

子どもの遊び (その6)

E・A・A・フェルメール

浜口順子訳

ここまで遊びについて論じてきた中で、子供の年齢の問題は、暗示する程度にとどめざるを得なかった。しかし年齢を重ねるごとに、子供の世界をとり結ぶ関係が多様化するの言うまでもなく、遊びの中で心的—身体的な自我を自由に制御することが次第にできるようになる。遊びの循環性運動や感覚受感的遊びなどの遊びの位相は、きわめて早く、乳幼児期からすでに出現している。そこで子供はもう、遊びとしての対話（子供と遊び対象とのダイアロギ的關係）が可能になっているのだが、知覚的世界からの諸印象が、情緒の受容能力の限界を越えて大きくなりすぎたり、別の言い方をすれば、子供の直観的世界がかきたてられすぎたりすると、そうした対話的状况は実現され得ない。

自我を制御することが遊びを可能にするが、この自我とは、身体的態度と世界をとり結ぶ関係との心的—身体的統一として理解されなければならない。遊びが発展し

ていくためには、自我を制御できる範囲が拡大していく必要がある。およそ四才ぐらいになると、つまりまだ幼稚園時代にあるわけだが、動作になめらかさが加わってきて^①、形態付与を通して、感覚受感的遊びよりも高次の段階に達することができるようになる。印象や表現を創造的に構成し、遊び対象であるモノや、ひいては自身をもよく把握できるようになるのである。それでも遊びの循環性運動や感覚受感的遊びなどの幼少期の遊び形式もなお見受けられ、新たな創造的態度はこうしたものとかわるがわる選択されていく。

遊びの循環性運動は、主として学童期に新しい推進力を獲得する。運動能力はより機能的に、より合目的に、より経済的になる。運動領域を拡張しようとする衝動によって、身体をより自由に制御しようとする傾向は妨害され、このため落ち着きを失ってしまう子供もいる。子供がまだ自分の活動性に対処する術をよく心得ていない場合は、殊にそうだ。この時期、モノの直観的性質や感觸、親近性などに熱中する傾向は、以前ほどでは

なくなる。一方で活動半径が広がり、慣れ親しんだ環境の外側の領域へと踏み出し、さらに広範な世界を知るようになる。そこで子供は同年代の仲間達と出会い、彼等と共に新たな遊び世界を構築する。この際子供は、自分で使いこなすことができる技能を用いるが、これはまたその必要に迫られるからである。他の子供と一緒に遊べるためには、ボール遊びやなわとびや駆けっこができればならない。子供がもし他の子供との共同遊びに興じられないようであれば、これらの遊びの循環性運動はその強度を失うことになる。

しかし遊びの循環性運動からはまた別の位相の遊びも出現する。それは伝統やルールにのっとった遊びである。ルールを理解するには知的組織化を要するが、中でも、ルールに枠組された空間内においてもその新しい遊びの自由がちゃんと具体的に実現され得るのだということが、子供に了解されねばならない。同じことは、カルタ合わせやトランプなどの、知的組織化が前面に立つ遊びにもあてはまる^②。

競争への衝動がだんだんと強まり、子供社会に一定の位置を占めるようになる。ルールづけされた遊びの発展はたしかに阻害される。しかし自分の存在価値を確認しようとする行動と、遊びを進行させる自我の高められた活動性とが置き換えられてはならない。活動性は、より自由に自己制御できる自我を通して可能になる。自己制御できるようになることは、つまり自由を意味するのであり、これが勝負や蓋然性(チャンス)を競う遊びや、試合などへと子供を向かわせるのだ。

心的―身体的自我を制御できるようになっていくことは、遊び的循環性運動の遂行に必要であるが、これはまた感覚受感的遊びにもあてはまる。しかしこの自我は技能面よりもむしろ、感覚的反応性における自己保持の問題の方に関係している。幼児は諸印象に影響され易く、モノの触覚・感官的性質を喚起する印象にはすぐ引きずられてしまう。子供が自己保持できるかどうかは、他者との身体的寄り添いに依るところが大きい。運動機能が次第に発達し、幼児のよるべなさが失われていくプロセ

スの只中で、形態的表現を求める傾向が「騰貴」し、バランスを保とうとする。これが幼児期から学童期への移行をよりスムーズにする。学童期の子供は幼児ほど、形態付与によって情緒的充足を得られない。すでに見たように、学童期の子供にはモデルを模倣しようとする特徴があらわれ、モノの直観的な印象よりも、具体的な意味の方に興味の中心が傾くようになり、幼児期にはかなりの緊張をひきおこしてしまうようなものを志向し、熱中し始める。一方ではまだ遊びとしてのファンタジーを残しつつも、学童期の子供には、自分独自の形態付与をしようとする欲求とは無縁の模倣が起こるのである。情緒的反応性は低下し、遊びの形態付与への要求も減少するようだ。

情緒的反応性は、別の経路で出現してくる。技能面の発達が自我の遊びへの挑戦をひきおこしたように、身体的活動性の増大もまたこの挑戦を促す働きをする。青年期では特に、力強い遊び相手(対戦相手)を求める。つ

まり、保護された家庭的な状況からは遠ざかった世界を
求めるようになるのだ。この際、青年期の子供は遊びの
相手として自然的世界、殊にその自然的世界の脅威性、
神秘性などを追い求めていくことが多い。したがってこ
こでの遊びは、自己制御しようとする自我を通しての、
またその自我に対しての挑戦といえよう。自我は快・不
快体験を重ねながら、薄氷の上で自らを賭しているよう
なものだ。プロメテウスのごとく、^(※1)火だけでなく、その
火によって引き起こされる危険に伴なう不安とも共に遊
ぶのだ。青年期における性に関係した遊びにおいても、
新しく変化していく身体性と共に、そこに内在する快さ
と危機感とが同時に体験されるのである。なぜなら子供
は遊びにおいて、衝動に屈服してしまった自我とではな
く、自らを制御する自我と関わるからだ。自分を遊びに
向かわせる自由を見出した青年期にいたっても、勝敗の
可能性をめぐる遊びは続いていく。

発達の過程に現れる遊びの諸位相は、遊びが、いわば

自然から文化への橋渡しをするような発達経路の上にあ
るのではないことを示している。遊びはその両者の中間
に、独自の位置を保持している。遊びは自然的世界から
の抽出物ではないし、しかも文化という世界からも踏み
出している。自然、文化という双方の領域から重大な影
響を受けていることはこれまでにたびたび見てきた通り
だ。日常世界において大人は子供の遊びに対して開かれ
た空間を確保している。親の保護の下に子供は自分を衝
動の拘束から解放することができるのだ。人間の子供と
して子供は新しい形態的な表現を行なう自由を発見する
が、これは単なる自然の生活の中で（文化を介さずに）
遭遇される出来事ではないし、ましてや保育者の示すも
のを模倣して達せられることでもない。子供は大人と同
一化することを通して自分の姿勢を見出し、心的—身体
的自我としての自己自身を形成し、次第に自分の遊びを
確保できるようになるのだ。

読者もお気づきのように、本書の冒頭部分で遊びと現

実との関係について前もって粗描した際、イリュージョ
ンの(空想的・想像的)遊びの問題が、かるうじて触れ
られたままにとどま^(※2)っている。この点にもう少し深く立
ち入ってみることにする。子供にとってのイリュージョ
ンの遊びの意味へとさらにアプローチしてみたいのだ。

その枢軸はイリュージョンのな子供世界ばかりではな
く、人間ひとりひとりの世界にある。ここでは大人の世
界との関係にも言及されねばなるまい。大人たちは子供
に遊びの自由を与え、その創造性を鼓舞してきたのであ
る。しかし子供はまたここにおいても、イリュージョ
ンの世界を喚起するために、自ら貢献することを求められ
ているのだろうか。

(つづく)

《原註・参考文献(抄)》

①ポイテンディクは著書『人間の行動と運動の一般理
論』において、運動能力の発達段階について論じてい
る。(原註その1—⑤)

②(より高度に)知的に組織づけられた遊びにおいては、

直観性や身体性が強く作用している世界で期待や驚きが
もたらすような輝きが、もうすでにかなり失われてしま
っている。

《訳註》

(※1)ギリシャ神話中のタイタン族の英雄。天上の火
を盗んで人間に火を与えたため、ゼウスの怒りを買ひ、
コーカサス山の岩に縛られて、大鷲に肝臓を食われた
が、ヘラクレスに助けられた。

(※2)本訳その1参照。「幼児の教育」第八十五巻第
四号、四十三頁。

(お茶の水女子大学大学院)